

大学ボランティアセンターの現状と課題 全国における大学ボランティアセンター実態調査より

赤澤 清孝

(特定非営利活動法人ユースビジョン代表)

「大学ボランティアセンター（以下、大学VC）」は、学生のボランティア活動を支援する専門部署として大学内に設置されている組織である。

（特）ユースビジョンでは、全国の大学VCの実態把握を目的に、昨年、全国一―一五三の大学・短期大学を対象に「全国における大学ボランティアセンター実態調査」を実施し、調査結果をまとめた。本稿では、この調査データをもとに、大学ボランティアセンターの現状と課題について述べたい。

大学VC誕生の背景とねらい
― ボランティア活動が持つ教育力への注目と期待

大学VCが最初に設置されたのは一九八〇年代後半。ここ十数年の間で徐々に増加している（図1）。現在は、一三三大学・短期大学一―一八か所で設置されている（二〇一〇年二月現在、ユースビジョン把握分）。増加の要因としては、一九九五年一月の阪神淡路大震災でボランティア活動の重要性が広く認識され、関心をもったり、活動に参加したりする学生が増加したこと、大学教育においてボランティア活動の教育力が注目されてきたことが考えら

れる。

一方、政策的な動向では、二〇〇二年七月に発表された中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動等推進施策について」の中で、大学教育におけるボランティア教育政策が述べられたことがきっかけである。

また、二〇〇三年度からの文部科学省の事業「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」や「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」、また、二〇〇八年度からの「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」等も、近年の大学VC設立に大きく影響を与えている施策だ。ボランティア活動等の社会体験を取り入れた学生参加型教育など、大学VCの取り組みやセンター設立のきっかけとなる取り組みが多数採択され、実践されている。

大学VCの設置目的は、大学ごとに異なるが、多くは大学の建学理念にそった教育的な意義、大学の地域（社会）貢献が挙げられる。教育研究機関である大学が学生の学びや成長を育むことを目的として、学生のボランティア活動を支援することは当然の流れであろう。一方、地域社会の一員である大学が社会責任を果たすため、「地域に開かれた大学づくり」「地域社会に支持される大学」「地域貢献」を掲げ、ボランティア活動の支援を行うという流れもある。

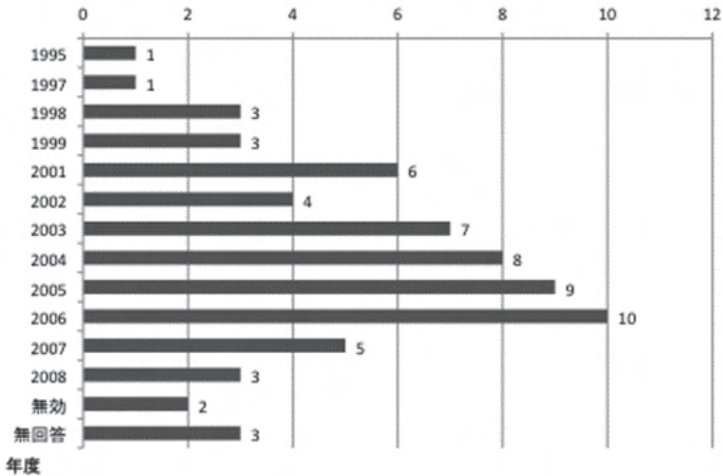


図1 設立年度別大学VC数

特集・ボランティア

センターの名称は、「ボランティアセンター」のほか、「ボランティア支援センター」「ボランティア室」「ボランティア活動支援室」「ボランティアコーナー」「ボランティアルーム」など、さまざまな名前で取り組まれている。なお、学生が主体で設立・運営したセンターは、「学生ボランティアセンター」という名称が比較的多い。

大学VCを設置する大学の姿 — 大学VCの特殊性

大学VCが設置されている大学について、実態調査の結果をもとに見ていこう（回答数六五センター）。まず、設置者別では、国立六・二％、公立四・六％、私立八九・二％と、九割近くが私立大学である。続いて、大学の規模別では、五割弱が「一〇〇〇一人～五〇〇〇人」の小規模大学が占め、次に「一〇〇〇〇一人以上」の大規模大学（二三・一％）が続く。さらに、設置学部の割合を見ると、文学系が最も多く、福祉系、教育系と続き、対人援助や他者とのコミュニケーションに関わる学部が設置されている大学に比較的多い傾向にあるが、規模や設置学部の種別では、目立った特徴は見られない。

学内の設置体制をみると、「学長直結型」が二四・六％、

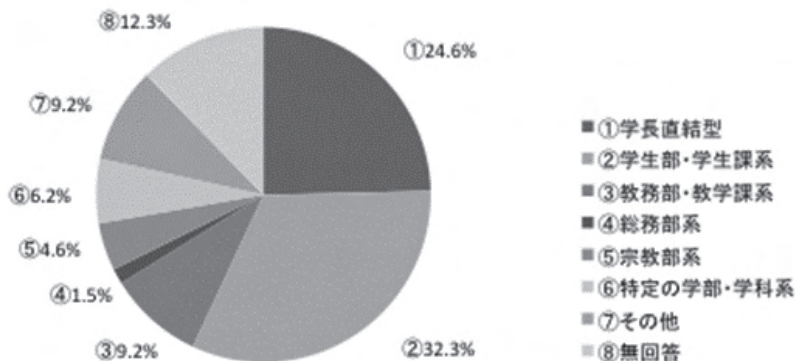


図2 学内の組織・機構におけるセンターの位置づけ

「学生課・学生部系」が三二・三%、「教務部・教学課系」が九・二%と続く(図2)。設置形態も様々であり、従来からある他部署(業務)と比べ、特殊な部署といえる。その特殊性の理由としては、「ボランティア(活動)」が、学内で様々なとらえ方や考え方があり、地域との関わりや連携の場面が多いこと、大学VCの実践の蓄積が少なく参考事例が乏しいこと等がある。そのため、大学としても、担当職員も、ボランティアセンターの運営を、模索しながら進めているのが実態である。

大学VCが行う事業
—標準的な事業と特徴的な事業

大学VCの事業内容や実施割合については、図3に示した。現状では、「(1)情報収集提供活動(九三・八%)」「(2)ネットワーク活動(八六・二%)」「(3)資源提供活動(八一・五%)」の上位三つが、現在の大学VCの標準的な事業といえそうだ。この三つの事業を詳述する。

「(1)情報収集提供活動」とは、地域から寄せられるボランティア募集情報を受け付け、学内掲示板での掲示やメールマガジンでの発信、ボランティア説明会等のイベントでの

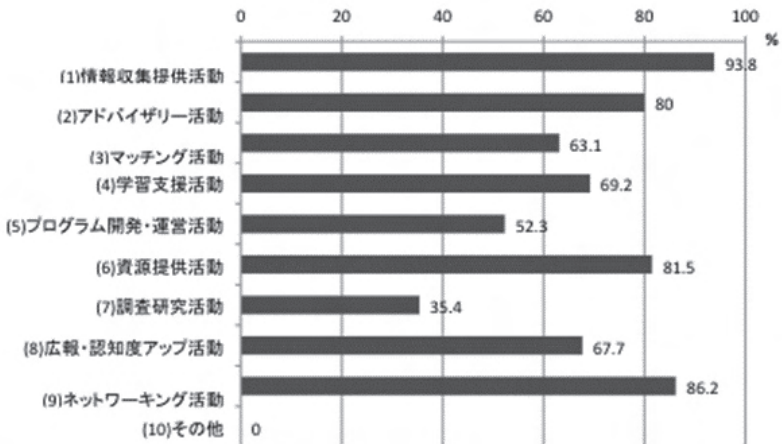


図3 大学VCの事業内容

ここで示している事業内容の10分類は、興相寛「学生の自主的活動を支援する」、財団法人内外学生センター『大学とボランティア』2001年、129ページの「ボランティアセンターの活動内容」を参考に、筆者らが加筆修正を行ったものである。

情報提供など、様々なツールを利用して発信する事業である。

情報の受付に関しては、学生を送り出す機関として、リスクがある活動やトラブルに巻き込まれる可能性のある活動を紹介することがないよう注意が必要だ。具体的な対応策として団体登録制度を設けたり、情報受付の規定を定めたりする大学もあるが、規定はなく担当者・責任者の判断で受け付けているケースも多い。その理由としては、担当者・責任者自身には、ある程度の基準を持って判断しているものの、センターとして定める段階にないこと、寄せられるボランティア情報が多様であるため規定として整理できていないこと、などが考えられる。

なお、企業等の営利団体からの依頼、個人（障がい者当事者や家族など）からの依頼、有償の活動（交通費・食費等の実費を超える活動）への対応状況は、四割前後であった。

「②ネットワーク活動」は、VC運営を円滑に進めるために地域の機関や組織と交流・連携する事業である。学外との交流や連携の機会が多い大学VCの一つの特徴である。

「他大学のVC」との関わりでは、他大学と「情報交換や

課題などを話し合える関係がある」大学が半数で、学内の他部署と分かち合いにくい内容等について連絡や相談をしている様子が伝わってくる。しかし、二五％は「全く関わりがない」と孤立している大学VCもある。

次に「地域の支援機関（ボランティアセンター等）」との関わりでは、「まったく関わりがない」大学VCはわずか六％で、「ボランティア情報や団体について互いに問い合わせできる関係がある」大学VCが八割に上った。ボランティア情報の見極めや判断をする時には心強い。

上記以外の「地縁団体」「地元の商店」「企業」「小中学校」「施設・NPO・NGO」「行政」との関わりは、「学生ボランティアを受け入れてもらっている、送り出している」というつながりが大半を占める。様々な組織において、学生の力を地域に還元しているといえるだろう。「行政」との関わりでは、「イベント等の協力や共同開催」も五割弱と多く、「施設・NPO・NGO」との関わりでは、「正課の授業で講師、ゲストスピーカーとしての協力」も三割を超えている。この事業は、学生に直接的に結びつくわけではないが、学生のボランティア活動支援を展開するために間接的で重要な活動といえる。

「③資源提供活動」は、活動スペースや備品、資金の提供

など、学生個人や学内のボランティア団体が活動をするための環境整備を行う活動である。「大学VCに求められる物理的な機能とは何か?」という観点でとらえることもできるだろう。最も多く提供されているのは「図書・雑誌・資料」で八割を超えている。次いで「ミーティングスペース」、「作業スペース」が六割。なお、「学外の助成金情報」が五割弱、「学内の助成金」が三割強と、資金提供も行っている大学VCもある。

これまで述べた三つの事業の他に、大学VCの特徴的な事業として「(5)プログラム開発・運営活動(五二・三%)」や「(4)学習支援活動(六九・二%)」がある。ボランティアに関わる学びとは「ボランティアについての学び」「ボランティア活動に参加するための学び」「ボランティア活動への参加を通じての学び」があるが、「(5)プログラム開発・運営活動」はこれらを実践する場である。実施割合は、五、六割程度にとどまるが、教育的な意義の設置目的と照らし合わせるならば、この事業は欠かせないといえる。

「(5)プログラム開発・運営活動」は、ボランティア活動を含んだプログラムを実施する事業であり、プログラムの位置づけ(正課・課外)や「事前事後学習の有無」「期間」は様々だった。「活動」を軸とするため受入先との連携や

役割分担が必須だが、「協定書や取り決めなどの書類」の有無はちょうど半数にわかれた。

地域や受入先のニーズを把握しプログラムに組み込むこと、大学や学生の事情のみを優先しないよう留意すること、活動のふりかえりや評価のポイントをつくること、など、プログラム開発は、大学VCが有するネットワークやノウハウ、専門性が要求される高度な取り組みである。

「(4)学習支援活動」は、「啓発・きっかけづくりのための講座、学習会」が七割弱、「活動スタートに当たっての知識やスキルを学ぶ講座、学習会」が六割弱と高い割合で実施されている。一方、「スキルアップや継続のための講座、学習会」と「学内ボランティア団体向けの組織運営のための講座、学習会」は、二割弱と少ない。活動を通して、社会にある課題に気づき・発見すること、自ら考え、行動することなど、主体的な学びにつながるような組み立てや内容が求められる。

大学VCのスタッフ体制

―職種や雇用形態、組み合わせ、人数は多種多様

大学VCの事業執行や予算管理等に携わるスタッフについては、三つの軸で概観したい。

特集・ボランティア

まず、スタッフの職種別では、教員、事務職員、専門職員（コーディネーター）の三種がある。職種ごとに雇用形態に特徴があり、教員では正規雇用で、VC業務は兼任が約七割。事務職員は、正規職員で兼任が四割で、部署の異動によって大学VCに着任する場合もある。専門職員は、嘱託契約職員で専任が半数を占める。三年（五年）で専門職員が交代するため、ネットワークやノウハウが途切れ、センターの財産として蓄積されにくい課題が以前より指摘されている。

スタッフの構成については、図4の通りで様々な組み合わせがある。スタッフの人数は最少人数が一人、最大人数が一人、平均は三・五人と多様だ。

教職員以外で、学生がセンターの運営に関わっていることもある。教職員との協働で活動を展開しているVCのほか、学生が主となって運営しているVCでは、組織の意思決定、日常のコーディネーション等全てを学生が担っている。

大学ボランティアセンターリソースセンターの取り組み — 大学VCをとりまく課題

（特） ユーザーが運営する大学ボランティアセンター

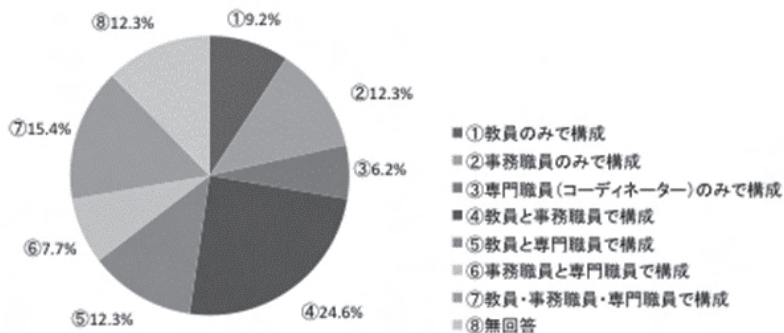


図4 教職員体制別割合

表1 「大学ボランティアセンター全国フォーラム」の基調講演・分科会
テーマ（主なもの）

- ・学生のボランティア活動支援の意義と展望～教育変革の動向と大学V Cのあり方～（基）
- ・学生の学びと地域への貢献をつなぐ大学V Cの価値と果たすべき役割（基）
- ・大学V Cにおけるコーディネーション基礎講座（分）
- ・学生の学びと成長を促す仕掛けづくり（分）
- ・大学V C自己評価ツールを作成しよう（分）
- ・大学V Cに求められる本物の『教育力』と『地域貢献力』（基）
- ・大学V Cにおけるプログラム評価（分）
- ・大学V Cスタッフの機能・役割とは？～私たちの専門性を私たち自身で語ろう～（分）

リーソースセンターは、大学V Cの課題やノウハウ、情報等の集約・発信を通し大学V Cの設立・運営支援を行うことを目的に、二〇〇七年より本格的に活動を開始した。

実態調査の他、大学V C情報サイト「大学V C情報Web (<http://www.daigaku-vc.info/>)」の運営や大学V Cの教職員対象の研修会「大学V C全国フォーラム（以下、全国フォーラム）」、学生スタッフ対象の合宿研修「大学V C学生スタッフセミナー」の開催、大学V Cの指標づくりを試みた「大学V C自己評価ツール」の研究開発など、大学V Cの現役スタッフや研究者等の協力を得ながら活動を展開してきた。

「全国フォーラム」で実施したセッションの主なテーマは表1の通りであるが、ここから大学V Cをとりまく課題の一端が見えてくる。

最後に、当団体の取り組みから見えてきた大学V Cの課題について二点述べたい。

一点目に、「大学ボランティアセンターの評価のあり方」である。近年、大学において自己評価や第三者評価が重要視され、大学の一部署である大学V Cも同様に評価を求められるようになってきた。何をどのように評価するのか、

何をもって成果とするのか、単なる量的な面だけではない質的な評価の指標について検討を進めていくことが必要である。

二点目は、「スタッフの専門性の明確化、可視化」である。大学VCの活動の成果は、その運営を担うスタッフの働き如何に依るところが大きい。しかし、現場で働くスタッフには、どんな経験や知識、能力が必要かという点については未整理の状態である。今後、大学VCの取り組みが進展していくためには、スタッフの専門性を明らかにし、それに基づく採用や配置、育成を進めていくことが不可欠だろう。

これらの課題解決のヒントは、大学VCのスタッフの実践の中にこそ多く秘められている。実践者の方々との情報交換や議論を重ね、当団体としてもこれらのテーマを追いかけていきたい。

本稿で紹介した調査結果の詳細をお知りになりたい方は、調査報告書「地域貢献活動による学生の学びと成長を促すために～大学VCに必要な3つの機能」をご覧ください。入手をご希望の方はユースビジョン（電話：075-254-8617）まで。大学ボランティアセンター情報Webからも注文可能です。

書名：地域貢献活動による学生の学びと成長を促すために～大学VCに必要な3つの機能

発行：特定非営利活動法人ユースビジョン

ウェブサイト <http://daigaku-vc.info/>

2009年3月発行

A4判 72ページ

定価 1500円

